

■スタッフ

統括……………	木村淳
演出……………	鬼澤陽子
演出助手……………	菊池葉子
舞台監督……………	佐々木仁美
	<small>(劇団このゆびとまれ)</small>
大道具……………	虎渡シロ
	<small>(劇団このゆびとまれ)</small>
	田中雅樹
	<small>(フリ)</small>
	金子留美
	<small>(劇団九月とテアラ)</small>
照明……………	小野寺真澄
	<small>(フリ)</small>
音響……………	関田由美子
	<small>(劇団このゆびとまれ)</small>
小道員……………	田口圭一
	下家明美
	横矢裕
	中村真恵
衣装……………	近藤真弓
	宇方康夫
制作……………	菊池葉子

■協力／カメラのこだま・盛岡音響・岩花薫・坂下里美・坂本有佐・中村秀子・劇団このゆびとまれ・榊原明徳

作者 藤原 正 教

台本を書きあげて、しばらくして劇団のメンバーから「タイトルですが、『くる』ですか『きたる』ですか」と聞かれた。「オー、いー父来る」。これは迷いますね。『きたる』と答えると、納得した顔になった。劇団・結の旗揚げ公演は「いないない婆あ」だった。新聞社から問い合わせがあった。「これは、婆あと書いて『ばあ』。『いないないばあ』でいいんですよ」と。どちらでもいいというのには、読者が困るわけで、紙面には「ばあ」とルビが打たれて掲載された。

芝居を見たある演劇ファンは、「最後にお婆さんが、『いいないばあ』をするべきだった」と力を込めてアドバイスしてくれた。

タイトルとは奥が深いものだと、しみじみ思った。

以前、「夏ノ夜ノ夢」という

台本を書いた。盛岡劇場に隣接してあったカフェ太平洋軒に勤める女性従業員「夏(ナツ)」と宮沢賢治の出会いを書いたものだが、ある劇団員は、シエイクスピアの「真夏の夜の夢」と勘違いして作品を某町の文化団体に売り込んだ。公演日が決まってから、その劇団員は驚いた。「シエイクスピアじゃないのか」「真夏ではなくて『夏』の話さ」と説明した。

東京を拠点に活躍していた私が敬愛する劇作家が、『夏ノ夜ノ夢』を書いているんだよな。俺、今度、書かなきゃいけないんだ。ちよっと、読ませてくれないか」と。実はと、粗筋を説明すると劇作家は「分かった」。

タイトル付けは楽しい。でも、「タイトル付けに時間をかけるなら肝心のホンをしっかり書け」の声も。ホンと、そう思う。